

## 天声人語

明治40年だから109年前の5月、21歳の石川啄木は妹を伴つて津軽海峡を渡った。故郷での騒動で白眼視され、「石をもて追はるるごとく」ふるさとをのがれて、北海道に新天地を求めた▼陸奥湾に臨む青森市内の公園に歌碑が立つ。へ船に酔ひてやさしくなれる／いもうとの眼見ゆ／津軽の海を思へば）。いまは「子どもの日」の5日に函館の地を踏んだ。北の大地を彩る遅い春が、海峡を越えて北海道に渡る頃である▼梅、桃、桜の開花前線は、本州北端で待ち合わせるようにして、5月初めにかけて一斉に海峡を渡っていく。天下の春を集めた函館は、傷心の啄木に美しく映つた。つかのまの幸福な日々を、そこで過ごすことになる▼その函館へ、待望の新幹線が延びる。「ふるさとの訛なつかし／停車場の人ごみの中に／そを聴きにゆく」。啄木の歌碑のある上野駅をへて東京から約860キロ。昭和の演歌にうたわれた北への旅は、きょうから4時間2分にまで縮まる▼ひと足早い「春」ながら、前途の厳しさも聞こえてくる。一番列車こそ25秒で売り切れたが、この先は空席も目立つ。飛行機との競争も多難らしい。赤字がかさんで「冬景色」に沈まぬよう、お願ひしたい▼ビジネスより観光需要に期待する声もある。15年後には札幌まで至る計画という。そこには啄木の「石狩の都の外の／君が家／林檎の花の散りてやらむ」という叙情ゆたかな歌碑が立つ。北への憧れをかき立て、旅情で売る新幹線。それもいい。

2016・3・26